

1 次の問いに答えなさい。

(1) 次の□に漢数字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

- ① □ 転□ 起 □ ② □ 死□ 生 □ ③ □ 苦□ 苦 □
④ □ 寒□ 温 □ ⑤ □ 者□ 扱□ ⑥ □ 差□ 別 □

(2) 次の①～⑤の語句はすべて慣用句です。空欄に適切な身体の一部を表すことばをひらがなで書き入れ、その意味として、ふさわしいものをあとの語群から選び、記号で答えなさい。

- ① □ 塩にかける ② □ が滑る ③ □ を巻く
④ □ を落とす ⑤ □ が出る

ア 言うてはいけないことをつい言うてしまう。

イ 元気をなくし氣力を失ってしまう。

ウ 驚きあきれ感心して言葉も出ない。

エ 予算を超過して赤字となる。

オ いろいろ世話をして養育する。

(3) 次の①・②のア～エの中には、種類が異なる語が一つずつ入っています。次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① ア 小さな イ すなおな ウ じょうずな エ 静かな
② ア とても イ ぜび ウ それで エ そっと

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

梢渡のこの崖はまっ赤でした。

それにひどく深く急でしたからのぞいて見ると全くくるくるするのでした。

谷底には水もなんにもなくてただ青い梢と白樺などの幹が短く見えるだけでした。

向こう側もやっぱりこっち側と同じようでその毒々しく赤い崖には横に五本の灰いろの太い線が入っていました。ぎざぎざになって赤い土からはみ出していたのです。それは昔山の方から流れて走って来てまた火山灰に埋もれた五層の古い熔岩流だったのです。

崖のこっち側と向こう側と昔は続いていたのでしょがいつの時代に裂けるか割れるかしたのでしょうか。霧のあるときは谷の底はまっかだなんにも見えませんでした。

私をはじめてそこへ行ったのはたしか尋常三年生か四年生のころです。ずうっと下の方の野原でたった一人野ぶどうを食べていましたら馬番の理助が鑿金の切れを首に巻いて木炭の空俵をしょって大股に通りがかったのです。そして私を見てずいぶんな高声で言ったのです。

「おいおい、どこからこぼれてこころへ落ちた？ さらわれるぞ。キノコのうんと出来る所へ連れてってやろうか。お前なんかには持てないくらいキノコのある所へ連れてってやろうか。」

私は「うん」と言いました。

Y

私はもうほんとうに一生けんめい行って行ったのです。

私どもは柏の林の中に入りました。

影がちらちらして葉はうつくしく光りました。曲がった黒い幹の間を私どもはだんだんぐつて行きました。林の中に入ったら理助もあんまり急がないようになりました。又じっさい急げないようでした。傾斜もよほど出てきたのでした。

十五分も柏の中をくぐったとき理助は少し横の方へまがってからだをかがめてそこらをしらべていました。間もなく立ちどまりました。そしてまるで低い声で、

「さあ来たぞ。すきなくらいとれ。左の方へは行くなよ。崖だから。」

そこは柏や檜の林の中の小さな空地でした。私はまるでぞくぞくしました。*はぎぼだしがそこにもここにも盛りになって生えているのです。理助は炭俵をおろしてもっともらしく口をふくらせてふうと息をついてから、また言いました。

「いいか。はぎぼだしには茶いろのと白いのとあるけれど白いのは硬く筋が多くてだめだよ。茶いろのをとれ。」

「もうとってもいいか。」私はききました。

「うん。何へ入れてく。そうだ。羽織へ包んで行け。」

「うん。」私は羽織をぬいで草に敷きました。

理助はもう片っぱしからとって炭俵の中へ入れました。私もとりました。ところが理助のとるのはみんな白いのです。白いのばかりえらんで炭俵の中へ投げ込んでいます。私はそこでしばらくあきれて見ていました。

「何をぼんやりしてるんだ。早くとれとれ。」理助が言いました。

「うん、けれどお前はなぜ白いのばかりとるの。」私がききました。

「おれのは漬物だよ。お前のうちじゃキノコの漬物なんか食べないだろうから茶いろのを持って行った方がいいやな。煮て食うんだらうから。」

① 私はなるほどと思いましたので少し理助を気の毒なような気もしながら茶いろのをたくさんとりました。羽織に包まれないようになってもまだとりました。

日がたって秋でもなかなか暑いのでした。

間もなくキノコもたいていなくなり理助は炭俵一ぱいにつめたのをゆるく両手で押すようにしてそれから羊歯の葉を五、六枚のせて縄で上を*あげました。

「さあ戻るぞ。谷を見て来るかな。」理助は汗をふきながら右の方へ行きました。私もついて行きました。しばらくすると理助はびたつととまりました。それから私をふり向いて私の腕を押さえてしまいました。

② 「さあ、見ろ、どうだ。」

私は向こうを見ました。あまつ赤な火のような崖だったので。私はまるで頭がしいんとなるように思いました。そんなにその崖が恐ろしく見えたのです。

「下の方ものぞかしてやろうか。」理助は言いながらそろそろと私を崖のはじにつき出しました。私はちらつと下を見ましたがもう B してしまいました。

「どうだ。こわいだらう。ひとりで来ちゃきつとここへ落ちるから来年でもいつでもひとり来ちゃいけないぞ。ひとりで来たら承知しないぞ。第一みちがわかるまい。」

理助は私の腕をはなして大へん意地の悪い顔つきになってこう言いました。

「うん、わからない。」私はぼんやり答えました。

すると理助は笑って戻りました。

それから青ぞらを向いて高く歌をどなりました。

さっきのキノコを置いた所へ来ると理助はどっかり足を投げ出して座つ